

2016

ライブラリー

目 次

みなさんの新しい森	日本大学図書館 経済学部分館長 金田 耕一… 2
わたしのおすすめ3冊	経済学部分館運営委員会 副委員長 西脇 暢子… 3
人間とは何かを知るための本	経済学部分館運営委員会 運営委員 清水 純… 4
おもしろかった本	経済学部分館運営委員会 運営委員 武政 充… 5

みなさんの新しい森

日本大学図書館
経済学部分館長
金 田 耕 一

現代の図書館とはどういう場所なのでしょう。

かつて図書館とは、万巻の書物が眠っている知識の森でした。私たちはその森に足を踏み入れ、一冊の本を書架から引き出すことによって眠りから目覚めさせます。たとえば、何気なく手にした一冊の本のページをめくってゆくうちに、突然数行の文章が立ち上がって、心のうちの何かが揺り動かされるのを感じることがあります。また、偶然手にした別の本によって、それまで予想しなかった新しい興味が突然わきあがることもあります。図書館という知識の森は、出会いの場です。疑問をもって足を踏み入れる者を、この森はさまざまな答えを用意して待っています。しかし、はっきりした目的もなくさまよう者にも、この森は見知らぬ著者との予期しない出会いをあたえてくれたのです。そしてさらに、本を読みすすめるうちに、私たちは新しい自分自身と出会うことになるのです。

しかし、現代の大学図書館はもっと機能的な場所です。皆さんは明確な目的をもって資料を PC で検索し、必要な箇所をノートに書き写し、コピーをとり、レポートを作成し、試験の準備をします。現代の図書館は、このような知的作業をできるだけ効率的に、しかも快適にできる環境でなければなりません。さらに現代の大学図書館に求められているのは、個人の作業だけでなく、多くの人が知識とアイデアを持ち寄り、意見を交換しながら議論を積み重ね、一緒になってレポートを作成したり、プレゼンテーションの準備をしたりする、知的生産のための共同作業ができる場であることです。

平成 29 年 4 月にオープンする予定の新図書館は、新しい知識の森として皆さんに効率的で快適な図書館機能を提供します。PC を使うための Wi-Fi 環境も充実しています。グループワークの場所として、ラーニングコモンズとグループ学習室をそなえています。グループワークをつうじて、皆さんはこれまでになかった知的経験をすることになるでしょう。もちろん、新図書館は従来からの役割も果たします。知識の森のなかで答えを求めてさまよったり、ひとりで静かに読書や勉強に没頭したりする環境も用意されています。

新図書館にできる新しい知識の森をどのように活用してゆくのかは、皆さん次第です。しかし、そこが知識と出会い、見知らぬ著者と出会い、自分自身と出会い、また友人たちと出会う場所であることは変わりません。新しい出会いに胸をときめかせながら、ぜひ新図書館に足を踏みいれてください。

わたしのおすすめ3冊

経済学部分館運営委員会
副委員長
西 脇 暢 子

(1) 山本七平『「空気」の研究』文春文庫 1983年

304㉞Y31 5F 文庫・新書コーナー

「空気を読む」「水に流す」は私たちが日常적으로よく使う言葉ですが、「空気」と「水」とは一体何でしょうか。それを「読む」あるいは「流す」とはどういうことでしょうか。この疑問に対する答えを教えてくれるのがこの本です。著者は自身の戦争体験を通じて当時の日本に蔓延していた空気感とその裏に潜む日常性を、「空気」と「水」を用いて淡々と語っています。古い本ですが現代的な意義を多数含む不朽の名作です。

(2) 東野圭吾『白夜行』集英社文庫 2002年

913.6㉞H55 5F 文庫・新書コーナー

著者は一貫して少年犯罪をモチーフにした作品を出していますが、これもその一つです。映画にもなった人気作なので知っている人も多いと思います。主人公の男女がそれぞれ異なる人生を歩みながらも、実際には色々な場面で接点を持ち、男が影武者のように女を支えます。現代社会の闇を描いた良作です。

(3) 筒井淳也「仕事と家族－日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか」

中公新書 2015年

小笠原祐子 ㉞2016㉞ 指定図書 5F 文庫・新書コーナー

著者は各種統計データを用いた分析や国際比較を通じて、働く女性への負担が大きくなる要因が家事労働に対する男性の意識の低さと男性中心の働き方にあることを客観的に示しています。これをふまえて、それらをどのように変えていくべきかの提言をしています。社会現象を説明する際にデータをどのように使うかを知るのに適した一冊です。

人間とは何かを知るための本

経済学部分館運営委員会
運営委員
清水 純

私たち人間はなぜ毎日毎日とりとめのないおしゃべりを繰り返しているのでしょうか？また、人間の社会ではなぜもめごとや争い・戦争が絶えないのでしょうか？人はどうして何百万・何千万人も集まって大規模な社会を作ろうとするのでしょうか？

最近の人類学の研究成果は、ヒトとヒトの作る社会の謎に関するこうした疑問への答えを示してくれるようになりました。以下に挙げた本は、人類学の最新の研究成果について教えてくれます。そして、私たちヒトがもっている独特のくせや性質の意味を解き明かしてくれます。一見意味のない仲間とおしゃべりに時間を費やす日々がある一方で、ヒトの社会に争い事や戦いがなくなるとはならない日はない、そんな現在のヒトの在り方を生み出したのは人類進化の必然でもありました。

グローバル化した現代に、人類がどうすれば平和的に繁栄し、共存していけるのかを考えるために、学生みなさんにぜひ手にとって読んでほしい本です。

(1) 『人類進化の謎を解き明かす』

ロビン・ダンバー 著 鍛原多恵子訳 (インターシフト出版 2016)

469.211D97 5F

(2) 『人類史のなかの定住革命』 西田正規著 (講談社学術文庫 2007)

38911N81 5F 文庫新書コーナー

(3) 『友達の数は何人?—ダンバー数とつながりの進化心理学』

ロビン・ダンバー著 藤井 留美訳 (インターシフト出版 2011)

140.411D97 5F

(4) 『ことばの起源—猿の毛づくろい、人のゴシップ』

ロビン ダンバー著 松浦俊輔, 服部清美訳 (青土社 2016)

80211D97 5F

おもしろかった本

経済学部分館運営委員会
運営委員
武 政 充

(1) 司馬遼太郎 『花神』(上中下巻) 新潮文庫 2016年

913.6\\Sh15a\\1~3 5F 文庫・新書コーナー

東京は、二度、大きな戦火に巻き込まれている。一つは、大きな被害を被った太平洋戦争、もう一つは、限定的な被害に留めることができた戊辰(上野・彰義隊)戦争である。後者の戦争において、卓越した技術、明敏な頭脳、合理的な考えに基づき、作戦を主導したのが、主人公の大村益次郎である。結果として、江戸(東京)の戦火を最小限に抑え、軍事指導者としての声価を高めた。

変革期の人間像を追求し続ける著者にとって、明治維新は最大のドラマである。当時、無名であった大村は、恰好な題材であった。学祖の師でもあり、維新史の決定的瞬間に彗星の如く現れ、自身の最終盤に花を咲かせるように活躍した大村益次郎を知ってもらいたい。

(2) 磯田道史『天災から日本史を読みなおす 先人に学ぶ防災』

中公新書 2015年

210.1\\I85 5F 文庫・新書コーナー

日本列島は、地震の活動期に入ったと言われている。新進気鋭の歴史学者の著者が、古文書から読み解いた防災史の本である。地震学の視点からではなく、歴史学の視点から災害の実相にせまり、先人からの防災の知恵を学ぶことにより、地震や津波の対策を考えることができる本である。

(3) 吉田洋一『零の発見—数学の生い立ち—』 岩波新書 2015年

410.2\\Y86 5F 文庫・新書コーナー

「1」から「9」及び「0」という数字は、日々、何気なく使っている。著名な数学者である著者は、零が発見される以前において、零を使わない記数法で、数を数えることの難しさを明らかにしている。零の発見の偉大さを認識させ、零の発見が、そんなに簡単ではなかったことがこの本を読んで初めてわかった。数式を少なくし、数学(算数)が得意な人も、苦手な人も、数の世界に親しむことができる平易な入門書といえる。

発行年月：2018年8月
発行者：日本大学図書館 経済学部分館